

# 縮む日本社会への評価

研究開発部  
前田 正子

## <日本の世相>

都心部のタワーマンションは即日完売が続く、銀座にはあいついで欧米高級ブランドの専門店がオープンし、豪華客船の船旅ツアーはあっという間に売れ切れてしまう。しかし、その一方で失業率は上がり、倒産企業は増え、デフレの影はしのびより、日本社会には「痛みを伴う改革」が必要だと言われ、先行きが甘くないことだけは分かる。

そのような中で日本人の日本社会に対する評価は悪化しつつある。例えば図表1に内閣府が実施している世論調査の結果をのせた。これは「現代の世相についてどう思うか」という質問に対する回答であるが、例えば「無責任の風潮が強い」という否定的な評価は1980年には38.6%だったものが、2000年には53.0%と増加している。

一方、1980年代のバブル景気と共に「安定している」という肯定的な評価が上がってきたものの、1988年をピークに景気の後退とともに下がりはじめ、2000年にはわずか15.3%の人しかこれを支持していない。また、1992年からのデータである「社会にゆとりがない」は2000年に31.1%と上昇傾向を見せている。

## <縮む評価>

さらに同じ調査では、日本について「高い経済力をもっている」、「科学技術が進んでいる」という

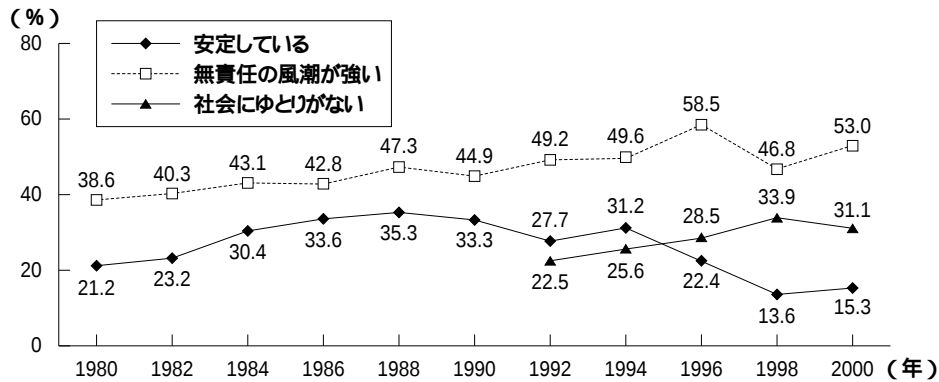
評価があてはまるかどうかを聞いている。図表2に挙げた数値は、それぞれについて「そう思う」と答えた人の割合である。これは1991年の数値からであるが、どちらも1991年以来、「そう思う」という人の比率が下がっている。

例えば資源のない日本は技術立国になることが生き延びる一つの方法だったはずだが、「科学技術が進んでいる」という評価も1991年には47.7%だったものが、下がり続けて2000年には27.4%となっている。また、「高い経済力を持っている」は、1991年に「そう思う」という人は55.9%いたが、2000年にはその3分の1近い19.8%にまで下がっている。実際のところ、今でも日本は世界の経済大国であることはまちがいないのであるが、個々の人々がそれだけ豊かさを実感できなくなってきたのだろうか。これを見ると1990年代は、日本人が技術力や経済力への自信を失った、まさに「失われた10年」だったということが分かる。

## <生活程度はどの程度？>

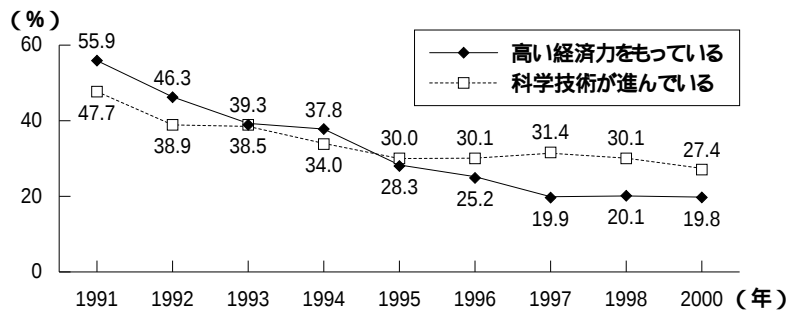
図表3には、当研究所が2001年に実施した「あなたの生活はどの程度ですか」という調査に対する回答を、男女の年代別に集計してみた。女性やその他の年代の男性に比べ、30代、40代の男性は「中の下」と答える率が高い。30代の33.1%、40代の34.8%が「中の下」と答えている。億ションを現金で買う「ニューリッチ」と言われる若い人々が出現する一方で、日本の所得格差は拡大しつつあるとも言われている。日本社会に対してだけでなく、それだけ普通の人々の自分自身への自己評価も下がってきているのかもしれない。

図表1 現代の世相についてどう思うか



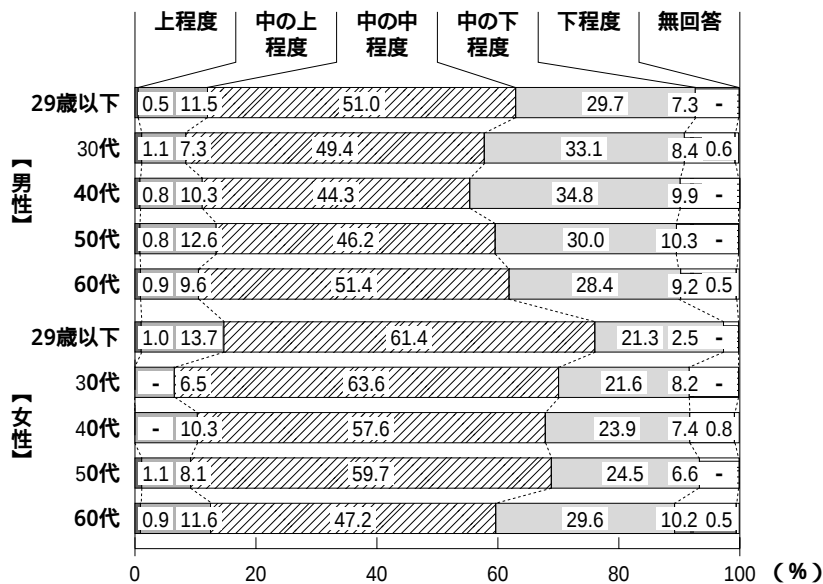
注:「安定している」は現代の世相の明るいイメージについて選んでもらったもの。  
「無責任」「社会に」は現代の世相の暗いイメージについて聞いたもので、いずれも複数回答である  
調査対象:全国20歳以上の者  
資料:内閣府『社会意識に関する世論調査』

図表2 日本社会についてどう思うか



注:「そう思う」と答えた人の割合である  
調査対象:全国20歳以上の者  
資料:内閣府『社会意識に関する世論調査』

図表3 生活程度はどのくらいか



資料:ライフデザイン研究所、2001年1月調査、男性1194人、女性1160人回答